

次の文章を読み、あとの問1～問4の問いに答えなさい。

これも今は昔、ある僧、人のもとへ行きけり。^A酒など勧めけるに、

^(注)氷魚はじめて出で来たりければ、あるじ珍しく思ひて、もてなしけり。

^(初物として出回り始めたので)

あるじ用の事ありて、内へ入りて、また出でたりけるに、この氷魚の殊^{こと}

^(出て来て見ると)

の外に少なくなりたりければ、あるじ、^Bいかにと思へども、いふべきや

^(麥だなどと思つたが)

うもなかりければ、物語しめたりける程に、この僧の鼻より氷魚の一つ

^(雑談をしているうちに)

ふと出でたりければ、あるじあやしう覚えて、「その鼻より氷魚の出で^(不意に)

たるは、いかなる事にか」といひければ、取りもあへず、「^Cこの比の氷魚

^(どうしたことか)

^(即座に)

は目鼻より降り候ふなるぞ」といひたりければ、人皆、「は」と笑ひけ

^(「わっ」と笑つた)

り。

『宇治拾遺物語』による。)

(注) 氷魚＝アユの稚魚。色は半透明で、体長三センチメートル程度。

問1 文章中のあやしうを現代仮名づかいに改め、ひらがなで書きなさい。

問2 文章中の酒など勧めけるに^Aの主語にあたるものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア あるじ イ ある僧 ウ 氷魚 エ 作者

問3 文章中のいかに^Bとあるじが思つたのはなぜか。「氷魚が……」に続く形で二十字以上、二十五字以内で書きなさい。

問4 次は、この文章を読んだあとに、花田さんと月森さんが文章中の

この比の氷魚は目鼻より降り候ふなるぞ について、話し合った場

面の一部です。これを読んで、あとの(a)～(c)の問いに答えなさい。

花田さん この発言を聞いて、その場にいた人は皆笑ったとあります。どこが面白かったのでしょうか。

月森さん この発言は、鼻から氷魚が出たことをあるじから問われて、とつさに答えたものですよね。鼻から氷魚が出てくるということは、この僧は、氷魚を と考えられますね。しかも、おそらく大量の氷魚を。

花田さん なるほど。だから不意に出てきてしまったのですね。でも、なぜこの発言では、氷魚が「出る」ではなく「降る」なのでしょう。

月森さん それは、「氷魚」という言葉の読み方、すなわち音の響きをふまえて発言したからではないでしょうか。即座に機転をきかせた発言だからこそ、人々の笑いを引き起こしたのでしょう。

花田さん 僧と食事の関係で言えば、香りの強い野菜や酒を、持ち込むことを禁じていた寺もあったようですよ。

月森さん 「不許葷酒入山門」です。実際に、寺の門のそばにある石柱に書かれているのを見ることがあります。時代背景を考えると、さらにこの文章の面白味が増しますね。

(a) 文章中の に入る言葉を、五字以上、十字以内で書きなさい。

(b) この僧の、機転をきかせたと考えられる内容として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア 鼻から出た氷魚を、激しく吹き荒れる雨に見立てること、その場を取り繕おうとした。

イ 鼻から出た氷魚を、眼球をうるおした涙に見立てること、その場を取り繕おうとした。

ウ 鼻から出た氷魚に、氷のかたまりであるひょう(雹)をかけて、その場を取り繕おうとした。

エ 鼻から出た氷魚に、棒状の氷であるつらら(氷柱)をかけて、その場を取り繕おうとした。

(c) 文章中の「不許葷酒入山門」は、「葷酒山門に入るを許さず」と訓読み、次の「葷酒入山門」はその一部である。訓読文を参考に、これに返り点をつけなさい。

葷酒入山門

氷魚が

問 4 問 3 問 2 問 1

(a) I

(b)

(c) 入山門

問 1 (あやしゅう)

問 2 (ア)

問 3 (例) 短時間の内に、思いのほか少なくなっていたから。

問 4 (a) (例) あわてて口に入れた

(b) (ウ)

(c) 葦 酒 入^ル 山 門^ニ

〈備考〉 問 3 同趣旨ならば正解とする。部分点を与えてもよい。

問 4 (a) 同趣旨ならば正解とする。

問3 「あるじ」が「いかに」と思った理由は、傍線部の前の「氷魚の殊の外に少なくなりたりければ」である。あるじが席をはずした短時間の変化であることを付け加える。

問4 **ポイント** (a) どうすれば、鼻から氷魚が出てくるような状況になるのかを想像してみる。氷魚があまりにおいしいので、あるじがい

い隙に氷魚を「急いで口に入れた」と考えられる。(b) 月森さんの二番目の発言の中の「それは、『氷魚』という言葉の読み方、すなわち音の響きをふまえて発言したからではないでしょうか」にヒントがある。つまり、「氷魚（＝ひょ）」と「電（＝ひょ）」をかけている。ひょうは空から降るものなので「降る」と言って、機転をきかせてその場を繕おうとしたのである。よって、ウが適切。(c) 「葷酒入山門」は、「葷」「酒」「山」「門」「入」の順に読む。「山門」は二字以上返って読むので、二字以上返って読むことを示す『一・二点』を用いる。「門」の左下に『一』、「入」の左下に『二』をつける。

〈主な返り点の種類〉

返り点は、漢文を日本の文法に従って読むための、順序を表す記号。

- ・レ点：下の一字から、すぐ上の一字に戻る。上の字の左下につける。
- ・一・二点：二字以上を隔てて、「一」をつけた下の字から「二」をつけた上の字に返って読む。
- ・上・下点：一・二点をつけた部分を挟み、さらに「上」から「下」に返って読む。